



川薩清修館高校の陸上・ホッケー・ウエイトリフティング、れいめい高校の卓球・体操・柔道、川内高校の陸上の選手たちも、さまざまな思いを胸に高校生最大のスポーツの祭典に挑んだ。

これまで苦しいこともあっただろう。諦めそうになったときもあっただろう。それでも歯を食いしばってここまでやってきた。地元鹿児島で、みんなの期待を背に、君たちは確かに大きく羽ばたいた。

今はゆつくりと体を休め、仲間と青春を謳歌するといい。高校生たちよ、感動をありがとう！

「自分一人では、ここまで続けて来られなかった。支えてくれた全ての人に感謝している。遠方の大会まで応援に来てくれた家族にも」
大会最後のレース、上位入賞への重圧からスタートが遅れた。得意のスパートで追いつけたが、あと一歩及ばず総合7位。悔し涙がこみ上げてくる。
しかし、ここで立ち止まる彼女ではない。大会翌日には気持ちを切り替え、10月に開催される茨城国体での雪辱を誓った。
「次こそは日本一を取りたい」
決勝に届かなかった同校の男子団体・女子団体のクオドルプル(かじ手付き4人制)チームと共に、日本の頂点を目指す。



卓球女子シングルス、川内高校3年の中本朱音。カットマンスタイルでゆったりと打ち返すリズムから、時折り鋭いスマッシュを織り交ぜ、果敢に戦った。スコアは、交互に得点し合う展開も初戦突破は成らなかった。

試合後のインタビュ、明るく話してくれた彼女の目に涙が浮かぶ。
今まで一緒に戦ってきた、仲間との思い出が、心に込み上げてきたのだろうか。仲間感謝し、競技に全力を尽くした美しい涙だった。

仲間との 出会いに感謝



「自分は10月にある全日本選手権に向けた挑戦が始まる。2人はお互い新体操を通じて、切磋琢磨してきた」かけがえのない仲間」と言葉をそろえた。
次の選手権でも、今まで応援してくれた人たちに恩返しをしたい。2人の躍進はこれからも続く。

「柔道が生活の一部(リズム)になっている」と少年のように語り、初の総体が地元開催で緊張したか問うと「かえってやりやすかった」と動じていなかった。
剣道で学生の頃、県内トップクラスだった父の影響を受け、武道(柔道)を始め、柔道の名門である鹿実の門をたいた。
体を鍛えて強くなれること、そして何より柔道から元気をもらえることがうれしくて、12年間続けてきた。

感動は無限大 南部九州から世界へ そして未来へ

熱い戦いが繰り広げられた令和元年度の南部九州インターハイが閉幕した。
このインターハイを最後に大好きだった、全てだった競技から退く者、舞台を変え、大学生や社会人として挑戦を続けさらなる高みを目指す者と、それぞれの未来への道を歩み出す。この大会の経験が今後の人生や競技に生かされ、新たな感動へとつながる原動力になる。



父の姿に憧れ
歩みだした柔の世界
鹿児島実業高校柔道部
柔道100kg超級の川内北中学校出身山元隆一(3年)は、初の高校総体で粘り強く戦い、不屈不撓の精神で5位に食い込んだ。
山元は内股を得意とし、常に前に出るスタイルが持ち味。1回戦では、強敵を相手に延長戦にもつれ込むも果敢に攻め続け、勝利を引き寄せた。
剣道で学生の頃、県内トップクラスだった父の影響を受け、武道(柔道)を始め、柔道の名門である鹿実の門をたいた。
体を鍛えて強くなれること、そして何より柔道から元気をもらえることがうれしくて、12年間続けてきた。



ボート競技女子シングルスカル、川内商工高校3年の石原玲奈。彼女が競技を始めたのは、高校生になってから。3年間を振り返ってこう語った。

美しいローイングで
水上を滑るように進む
川内商工高校ボート部

優勝には届かなかったが、最後まで歩も引かなかった姿は、見ている人の心にしつかりと残る。
「今後も練習に励みながら、さらにレベルアップして、今回以上の結果を残したい」と屈託のない笑顔を見せてくれた。

